
悲しい話

敬

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲しい話

【Nコード】

N7793B

【作者名】

敬

【あらすじ】

ある日に見た夢から始まった、ひとりの女性の悲しいだけでもないお話です。

昨日、悲しい夢を見た。恋人が私を嫌いになつてしまった。夢の中で恋人は私を抱きとめたから、私は恋人の顔が見えなかった。だけど恋人は私を今後どう扱うべきかをためらっている。夢だから何でも分かる。夢の中で恋人から離れたあと、悲しくなった。

朝が来て目を覚ましてはまだ悲しかったし、日が暮れても悲しかった。

週末、夢が現実になった。恋人は夢の中のように私を抱きとめた。やっぱり夢の中のように恋人の顔は見えなかったけど、ためらっているのが分かった。夢でもないのに分かった。だけど恋人は別れを切り出さなかった。そんなみじめなことはないと私から別れを切り出すと、恋人はなぜ、と聞きながらも、あなたがそういうならとすんなり別れを承諾した。現実の恋人は嬉しそうでも悲しそうでもなかった。

翌朝目を覚ますと声が出なかった。その日は風邪で声が出ないということにして仕事をした。しかし1日経っても2日経っても声は出ないままだった。病院に行った。医者はストレスから来るものでしょう、と軽く言った。

1ヶ月が過ぎても、私の声は戻らなかった。会社が私を疎んじ始めた。それでも私はそこで働き続けるしかなかった。突然声を失くしたまま新しい仕事を見つけることは不可能だった。

2ヶ月が経つか経たないかのうちに、会社からのいじめが始まった。上司は私に、この『おし』が！と怒鳴った。同僚たちは、私が職場を去る日を『Xデー』としてそれがいつなのかという賭けを始めた。私の声が出ないことを分かってわざわざ電話を回してくる人もいた。私が喉を指差して首を振るとくすくす笑った。その人と私は2ヶ月前まで仲良しだった。いつのまにか私の仕事はちよつとしたおつかいと社内の清掃だけになりつつあった。

恋人が去り、私が頼るものは仕事しかなかった。なのにその仕事までもが私から去ろうとしている。

今の私の望みは、このままの状況に私の精神が耐えられなくなり、精神病を発病することだ。その病気がどんどんどんどん進行していつて入院せざるを得なくなり、入院してもどんどんどんどん悪くなり、何もわからなくなることだ。毎日をさばいていくにはもう疲れた。自ら死を選ぶ気力すらない。

私が声を失って、3ヶ月目に突入した。会社からたたき出されるようにおつかいに出され道を歩いていった。若葉が芽吹きはじめたその景色は、私にとってそろそろ何の意味も持たなくなってきた。足元で、ペシャ、という音がした。そこに目をやると、粉々に潰れた猫の死体と人の嘔吐物があった。たぶん。もうすべてのものは意味を持たなくなった。

会社に戻る道の途中に、施工中の店舗を見つけた。何気なくその中を覗くと、頭にタオルを巻いた男の子がひとり、壁材を練っていた。その男の子の向こうには、目が痛くなるほど真っ白に塗られた壁だけが広がっていた。ひたすら白という色だけがそこにあった。

呆然と見つめる私に男の子が気が付きペコリと首を動かした。私もペコリと頭を下げてから歩き出した。

会社とは違う方向に向かって歩きながら考えた。私には、白に、ただ白いということに圧倒されるだけの感情と、人が頭を下げることの意味を理解する力はまだある。今、これから家に帰ったらまずは大きな声で泣くことから始めよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7793b/>

悲しい話

2010年10月15日08時34分発行